い～な
診療所
あまみ　中　　中　央　つなぐの　さくら
事務局
研究所
しらさぎ

大阪＋知的障害＋地域＋おもろい＝創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2717 号 2015.11.14 発行
==

異なることがうれしい――写真展『なにものか』オープニングトーク

齋藤陽道×長津結一郎　　　　　　　　　　シノドスジャーナル　2015 年 11 月 13 日

写真家・齋藤陽道氏は 2014 年 11 月から 1 年間かけて、京都、広島、福島、高知の 4 つ（※）のアール・ブリュット美術館を巡った。

「そこにまつわる施設、ひと、食事、空気、土地に触れながら、ふくらんでいくばかりのわからなさと、そことは別のところでより明晰になってくる直感との間で共鳴するリズムにうながされるまま１０体のなにものかを形にした。」

と書く彼は、いったい何と出会い何を撮影したのか――

2015 年 11 月 8 日（日）～11 月 23 日（月・祝）、3331 Arts Chiyoda 1F〈3331 ギャラリー〉にて、日本財団の主催により、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展「TURN／陸から海へ（ひとがはじめからもっている力）」関連企画として、齋藤陽道展「なにものか」が開催中だ。今回は、齋藤陽道氏と長津結一郎氏（TURN 展事務局／NPO 法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所代表理事）による、オープニング筆談トークの模様を抄録した。（2015 年 11 月 8 日、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展「TURN／陸から海へ（ひとがはじめからもっている力）」第３回東京フォーラム「ONE DAY TURN PARTY」より）

（※）みずのき美術館（京都府）、鞆の津ミュージアム（広島県）、はじまりの美術館（福島県）、藁工ミュージアム（高知県）の 4 館。

言葉よりも先に、『行ない』がある

長津　さて、今日は齋藤陽道さんの展覧会『なにものか』のオープニングおめでとうございます。

齋藤　ありがとうございます。一年越しのプロジェクトでした。4 つのアール・ブリュット美術館をめぐっての滞在製作。初めての体験でした。どうにかなってよかったです……。

長津　よかったー。みなさんの中で、もう展示を見た人はどれくらいいますか？…ありがとうございます。半分くらい手が上がりました。さて、どこから話せばよいのか。

齋藤　今回は新作写真展というよりも、ぼくが写真を通して何をみたいのか、何を信じたいのか、その源泉にいたるための途中報告展、という思いです。

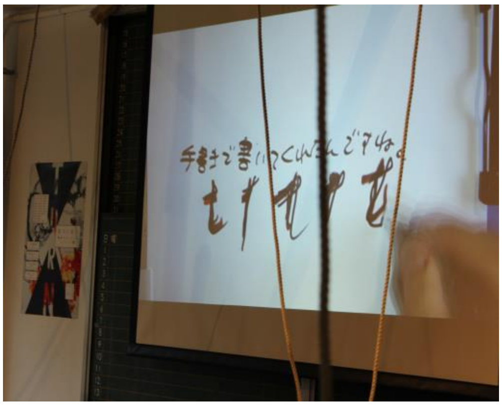
長津　展示を見せていただいた印象としては、すごく言葉が多かったり、いろんな出来事の痕跡が色濃くのこっている。写真を見ること、それ自体が製作のプロセスを追体験するような時間だなって思いました。

なので、まずは撮影をしている中でどんなことがあったのか、お話を聞かせてください。

鞆の津の『なにものか』（撮影：齋藤陽道）

齋藤　今回、特に印象的だったことが、京都のみずのき美術館での福村さんとの出会いで

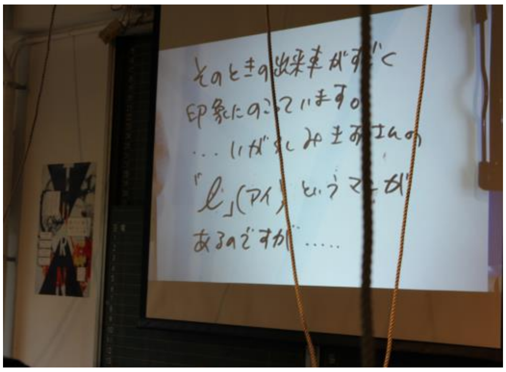
した。
　福村さんは、みずのき美術館の母体になっている社会福祉法人が運営している福祉施設に 40 年間いる人です。そして今ぼくがこうして書いているような、言葉をもって……いない方です。こう言ってしまうのも何か違う気がして、とても迷いますけれどね。
　福村さんは名刺を集めるのが好きだということで、ぼくにも名刺を求められました。でもその時、名刺を持っていなくて、手書きで書いた名刺を渡したんです。すると福村さんもご自分の名前を手書きで書いてくれたんですね。こんな感じで。



じで。

福村さんが名刺に書いた文字

　「ｔ」や「T」の形に似ていて、でもそのどちらでもない文字。それをオレンジ、青、赤の３色で重ねて書かれたんです。ぼくらが普段目にする文字ではないけれど、確かな確信を持って書かれた字です。そのときの出来事がすごく印象的に残っています。
　みずのきでは、タテ１００センチはある大きな仮面の「なにものか」を制作しました。そのとき仮面の原型はできていて色塗りをどうしようと考えていたのですが、名刺のやりとりで直感がおりてきて、福村さんに色塗りをお願いをしました。このときの強い直感というのも、不思議です。繰り返し言いますけれど、言葉はまったく交わしていないんです。
　どこから来たのだろうと思う。また、ぼくは何を見てそう感じたのだろうと思う。幾重にも色を重ねてぬっていました。その色を塗る流れを映像にもしています。スライドではなく、映像での作品公開は今回が初めてです。映像も奥が深くて、もっとやってみたくなりました。
　いがらしみきおさんの『I（アイ）』というマンガがあるのですが…。そのなかでも印象的なエピソードがあってそのことを思いだしました。この「アイ」の字も実は主人公のただの落書きのような、でもたしかな確信をもって書かれた意味のない記号であって、それを見る側が勝手に意味を見いだす、というエピソードなんですね。



いがらしみきお作の漫画・「I（アイ）」

　文字を見るときぼくらはそこから意味を見いだして……それがコミュニケーションすることだと思っていたけど、福村さんの名前の文字が書かれているのを見たとき、意味よりもまっさきにその「行ない」がくっきり見えたんですね。言葉の意味や理由よりも、まず最初にあるものは、人が人に向ける「行ない」だった。
　普段、ぼくも聞こえないということで音や情報から取り残されるから、言葉じゃないものを信じたいといつも思いつづけていて。その願いと、「人と人との間にはまず最初に行ないがある」という気づきとが結びついたとき、嬉しかったです。

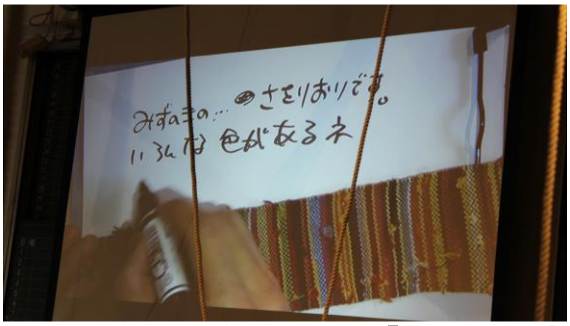
「異なることがうれしい」

　意味のしっかりした言葉を、しっかりと理解できることがコミュニケーションのすべてだと思ってしまうと、ぼくはなにもできなくなってしまいます。けれど、「行ない」のほうに焦点をあてることによって、ぼくにも声を見ることができるようになれると思いました。
長津　展覧会を見た方は、齋藤さんが書いたテキストもお手にとったかと思いますが、その中で、今齋藤さんが語っている話を「身体を通した声」と表現されていたのが印象に残

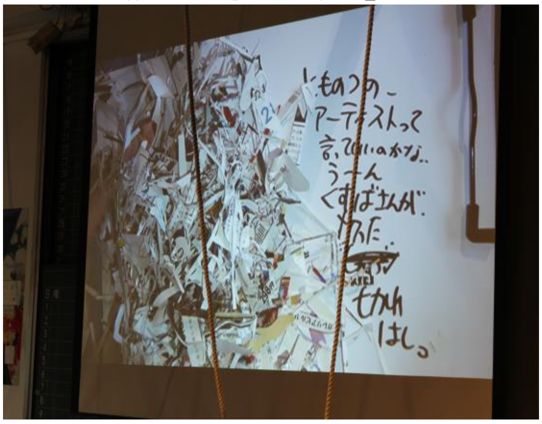
っています。
　また、テキストの結びに、「異なることがうれしい」という言葉も。これは、どんな出会いから生まれた言葉なのですか。
齋藤　「異なることがうれしい」というのは……、うーん、やっぱり異なるということを嬉しいと思えるようにならないと生きていけない、という実感からきています。こうして筆談トークできるのも、異なるから見出せた方法だし、それを楽しまなければ何にもならない。

みずのきの『なにものか』（撮影：齋藤陽道）

長津　「異なること」という言葉と「うれしい」が組み合わさっているのが、すごくぐっときました。
齋藤　でも、けっこう単純なことですよ。たとえば……
　これは京都市のみずのきで作られたさをり織りです。いろんな色があるネ。

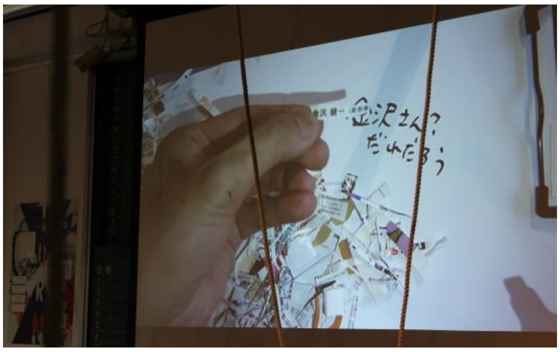


みずのきで作られた『さをり織り』



鞆の津のくすばさんが切った『切れはしの山』

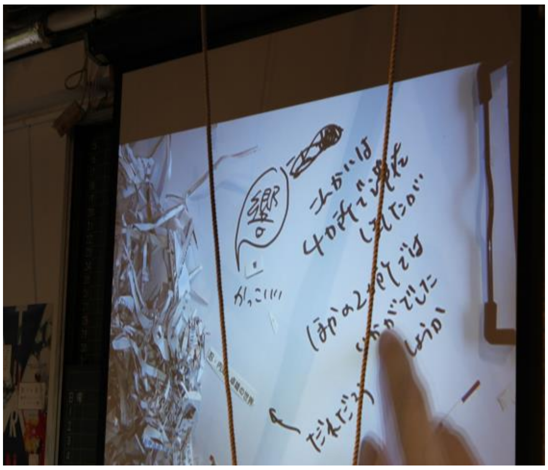
　これは鞆の津の……（「アーティスト」って言っていいのかな……うーん）くすばさんが切った切れはしの山です。ぼくもさっき気づいたことなんですが、これって適当に切っているんじゃなくて、ちゃんと文字を分けて切っているんですね。

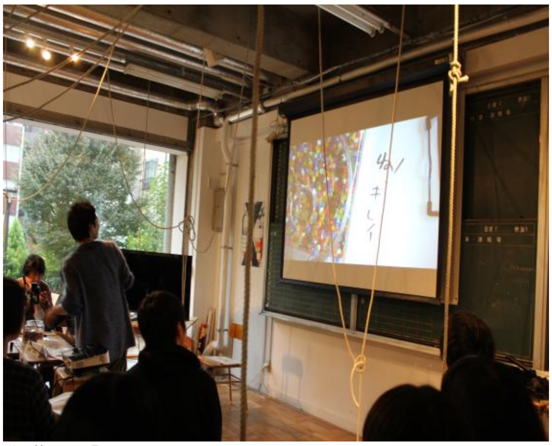


切れはし一つ一つが単語になっている（人の名前など）

　カオスの中の秩序。うつくしいと思う。
　ぼくの言う「異なることがうれしい」とは、そういう意味です。あまりにも言葉の意味だけを重視してしまうと、こういう行ないやふるまいは、意味を妨げるノイズとしてしか見えなくなってしまうと思っています。そういう、意味の通った言葉ではない、その人のリズムに隠された行ないを見いだすことは、時間がかかってしまうけれど、単純に楽しくて、うれしいことです。
　そういう謎の可能性を残したまま世界に飛びこんでいけたら、わからないこともすこしは怖くなくなって、そのもののうつくしさも直に目に入ってくるようになる、と、思います。そうだといいです。そう願います。
長津　今回は４ヵ所で滞在しましたが、他の２ヵ所ではいかがでしたでしょうか。
齋藤　福島のはじまりの美術館でも、カラフルさがキーになりました。

切れはしの山からどこかのだれかの名前を見つける





齋藤氏「アイロンビーズ。ね！キレイ」

はじまりの美術館ではアイロンビーズを使って、こういう風な「なにものか」が生まれました。利用者さんが作ったアイロンビーズの作品を組み合わせて、顔のようなものを作りました。どうしてこの顔のようなものがひらめいたのかは、ぼくもわからないです。その土地にいって、そこにいる人に会って、食事をして、それらをつなぐ細い線をたぐりつづけていったら、なぜだかそれが産まれてしまった。

作ったという思いは、まるでないんですね。そういえば、この感覚はぼくが写真を撮ったあと、出来上がる写真を見ると、自分の意図をまるっきり超えていることへの驚きと似ています。ぼくはコントロールしていないのですが、それはやってくる。別のところから。別の世界から。別の次元から。

はじまりの『なにものか』（撮影：齋藤陽道）

高知の藁工ミュージアムでは、他の３館とは違って食に力を入れているんですね。藁って、ごはんの元ですよね。それと特別天然記念物である高知県原産のオナガドリという文化が結びつながって、このなにものかがやってきました。

藁工の『なにものか』（撮影：齋藤陽道）

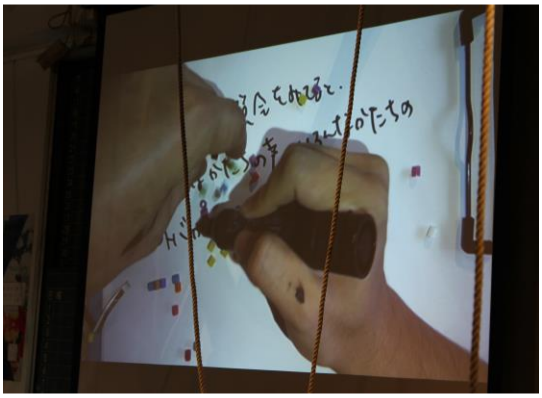
ここでも思うことがたくさんありすぎて…言葉につまります。食を願う気持ちはやはり普遍だよな、と思いました……まる。

長津　本当に展覧会を見ていると、いろんな形の声、いろんな形の言葉があふれている場所だと思います。ぜひみなさんも、長い時間いてほしいなと思います。

「見る」ことは、自分の核に立ち戻っていくこと

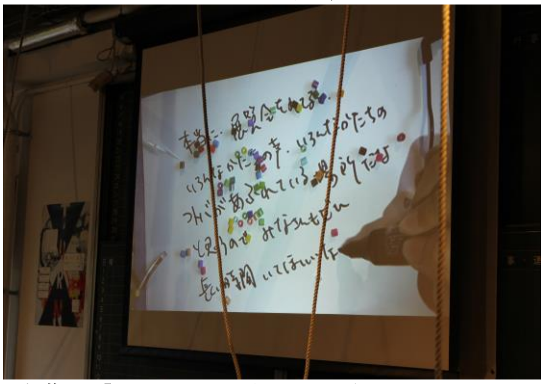
長津　「異なることがうれしい」と、「みんなちがってみんないい」は、同じでしょうか、それとも異なるでしょうか？どのように？

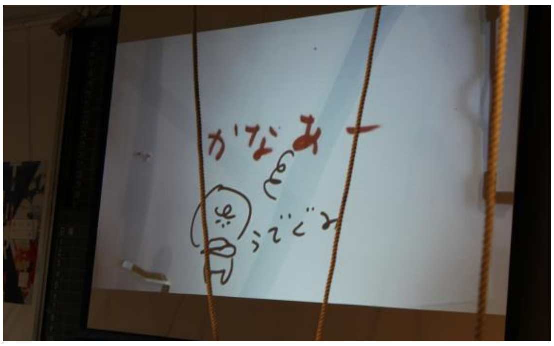
齋藤　「みんなちがってみんないい」は、たぶん、言っている人の実感がこもってないですよね……。自分を納得させたいがための言葉のように思います。AとBがあるとしたら、その差異を言葉で…頭で埋めようとしている感じ。



「異なることがうれしい」は、さみしさがまず地盤にある。AとBの差異はそのまま。それでも、なぜか「うれしい」と思えるものを見いだせたときの神秘感が元になっている。

アイロンビーズをばらまく齋藤氏





齋藤氏「…かなぁー（うでくみ）」

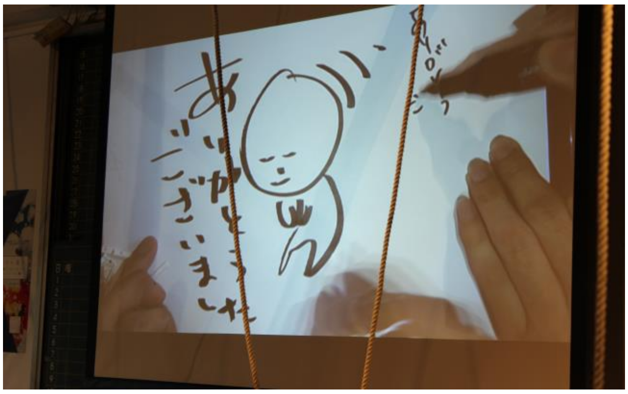
長津　今回は、写真展というより中間報告的なものだということですが、この先見たいものはありますか？

齋藤　この展示を通してよりわかってきたのですが、ぼくの言う「見たい」というのは、新しいものを切り開くことでもなく、表現することでもない。一個人の核に、立ち戻っていく方向にあります。

　うーん。ぼく自身が見たいものはなくて。どうやったら人が人と出会うよろこびに立ち戻れるか。それを言葉を使わずに行いたい……とか。そこに潜りたいのだと今回の展示を通して気づいてきました。

長津　ありがとうございます。「異なることがうれしい」をテーマに色んな方向にお話を伺いましたが、もう終わりですって。

齋藤　あらあら。早い。今回写真展とは思わずに報告会という認識で、ぜひ、（展示会場で配布している）MAPとテキスト、読んで下さるとうれしいです。



長津　展示も！

　齋藤氏・長津氏「ありがとうございました」

日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展 2014-2015

「TURN／陸から海へ」(ひとがはじめからもっている力)関連企画

齋藤陽道展「なにものか」

会期：2015年11月8日　（日）－11月23日　（月・祝）

時間：12:00 － 19:00（最終日は17:00まで）入場無料

会場：3331 Arts Chiyoda 1F 3331ギャラリー

主催：日本財団

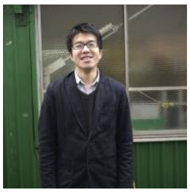
協力：TURN 展実行委員会（みずのき美術館、鞆の津ミュージアム、はじまりの美術館、

藁工ミュージアム)、3331Arts Chiyoda

齋藤陽道（さいとう・はるみち）　写真家

1983 年、東京都生まれ。写真家。都立石神井ろう学校卒業。2007 年、陽ノ道として障害者プロレス団体「ドッグレッグス」所属。2010 年、写真新世紀優秀賞（佐内正史選）。2013 年、ワタリウム美術館にて新鋭写真家として異例の大型個展を開催。2015 年、NHKE テレ「ハートネット TV」で特集。近年は Mr.Children やクラムボンといった人気ミュージシャンとの作品でも注目を集める。写真集に『感動』（赤々舎）、『宝箱』（ぴあ）、新刊に宮沢賢治の詩を写真で翻訳した『写訳 春と修羅』（ナナロク社）がある。

長津結一郎（ながつ・ゆういちろう）



NPO 法人「多様性と境界に関する対話と表現の研究所」代表理事

日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展事務局、NPO 法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所代表理事、慶應義塾大学研究員、東京家政大学非常勤講師。1985 年北海道生まれ、東京藝術大学大学院博士後期課程修了。専門はアート・マネジメント、社会包摂。障害者の表現活動をはじめとした社会包摂的な芸術活動を主たる研究対象とし、異なる立場や背景をもつ人々がどのように協働することができるのか、研究／実践の双方からのアプローチを試みている。主な活動に、医療・福祉分野を中心とした調査研究をもとに「生き抜くための“迂回路”」を探る「東京迂回路研究」（主催：東京都・アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）・NPO 法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所）がある。（撮影：齋藤陽道）

久貝友子さん、沖縄コロニー大賞受賞　オカリナで社会貢献

琉球新報　2015 年 11 月 13 日

沖縄コロニー大賞に決まり「今まで通り音楽を届けたい」と話す久貝友子さん＝１２日午後、与那原町

自立への努力や社会・文化芸術活動が顕著な障がい者らに贈る第２０回沖縄コロニー大賞（同実行委員会主催）の最終選考が１２日、那覇市のザ・ナハテラスであり、脊髄性小児まひによる左上肢・両下肢機能障がいのあるオカリナ講師の久貝友子さん（６１）＝与那原町＝が大賞に選ばれた。久貝さんは「まさか受賞するとは思わなかった。うれしい」と喜んだ

久貝さんは幼少期から養護学校で寮生活を送り、兄の影響で音楽好きになった。音楽教諭を目指したが、学校が障がい者に配慮された環境ではなく、夢を諦めた。その後にオカリナと出会い、１７年前から講師として活動を始めた。

現在は姉と設立した「久音（ひさね）の会」の活動で特別支援学校や施設などの慰問を続ける。コンサートも精力的に開き、２９日に通算５００回を迎える。

今後の抱負について久貝さんは「今まで通り音楽をいろいろな所へ届け、聞く人の心が豊かになる演奏をしたい」と意気込んだ。

高嶺豊選考委員長は「オカリナを通した社会貢献への努力」を選考理由に挙げた。贈呈式は１２月９日の「障害者の日」にザ・ナハテラスで開かれる。賞は今回で終了し、来年度以降は別の形の顕彰を検討する。

社説：いじめ調査　ＳＯＳをつかんでこそ　　毎日新聞　2015 年 11 月 13 日

生徒の苦悩をすくいとれなかった悲痛な教訓は生かせなかった。

名古屋市立中学１年の男子生徒が今月１日、いじめに苦しんできたことを書き残し、自ら命を絶った。

学校側はそれまでのアンケートなどで「いじめは把握していない」としていたが、市教育委員会が緊急に校内アンケートをし直したら、２０人が生徒へのいじめを見たと答え、５７人が本人以外から聞いたという。本人から相談を受けた生徒もいた。

暗然とする。

今年７月、岩手県矢巾（やはば）町でいじめを受けていた町立中学２年の男子生徒が自殺した。

やはり学校はいじめをとらえていなかった。生徒は担任と交わすノートにはつらさを訴え、自殺の示唆さえしていたが、情報は教員間で共有されなかったという。

見落とされたいじめが相当数あるのではないか。文部科学省は、当時全国集計した２０１４年度いじめ認知件数は信用できないと、異例の調査やり直しを指示した。

その結果、件数は小中高校などで当初集計より約３万件多い１８万８０５７件に上る。その発表の５日後、名古屋の生徒は命を絶つが、やり直し調査のいじめ件数の中にもこの生徒の被害は入っていない。

２年前、いじめ防止対策推進法が施行され、各学校は独自に防止方針を定め、校長らを中心に対策組織を備えたことになっている。矢巾も、今回の名古屋も例外ではない。しかし、形はありながら、結果的に機能していない。学校側と子供たちとの間の信頼関係や細心の配慮が大きなポイントになるという指摘もある。

アンケートでは、今回の名古屋の場合は記名式、市教委のやり直しは無記名だった。記名が率直な回答をためらわせた面はなかったか。

調査は、いじめに苦しんでいる子供たちが発信する「ＳＯＳ」を踏み込んでつかみ、救うことにつながらなければ意味がない。今回の全国調査で４割の学校がいじめを「ゼロ」としていることに文科省は首をかしげる。「いじめはどこでも起こりうる」という認識と注

意深い観察がなお足りないのではないか。
一方で、子供たちが主体的にいじめの卑劣さ、被害者の苦しみを感じ取ることが未然防止にもつながる。
そうした視点で被害者、加害者の役を劇のように演じながら学ぶ「ロールプレー」など、さまざまな取り組みもある。成功例や教訓を、もっと各学校現場で分かち合いたい。
教員の繁忙と問題の抱え込みや孤立。多数のいじめ認知件数をマイナス評価ととらえる土壌もまだある。いじめ問題への取り組みは、学校教育改革にもかかわるといえよう。

社説：非正規雇用４割　「氷河期時代」の支援を　　毎日新聞　2015 年 11 月 13 日

パートや契約社員、派遣社員など非正規雇用の社員が初めて雇用労働者全体の４割に達した。２０１４年の「就業形態の多様化に関する総合実態調査」でわかった。「アベノミクスによって雇用は１００万人以上増えた」と安倍晋三首相は主張するが、増えているのは賃金が低く身分も不安定な非正規社員だ。
安倍政権が発足する前の１２年４～６月期と１５年同期の比較でも、雇用者数全体は１２１万人増えているが、その内実は非正規社員が１７８万人増え、正社員は逆に５６万人減っているのだ。
安倍首相は好景気のため働いていなかった人がパートで働き出し、定年後に非正規で働く高齢者も増えていると主張する。たしかに６０歳を過ぎても希望者を雇用する義務を企業に課したことでパートの高齢者は増えているが、正社員の減少は企業側の都合で起きている面が大きい。
企業が非正規社員を雇用する理由で最も多いのが「賃金の節約」だ。有効求人倍率（８月）は好景気を反映して１．２３倍と二十数年ぶりの高水準だが、正社員に限れば０．７６倍と１倍を下回っており、狭き門であることに変わりはない。
特に、３０～４０代の非正規社員が増えていることを看過してはならない。１９９３～０２年ごろの就職氷河期に学校を卒業した人々は条件の良い就職先がなく、非正規の職を転々としてきたケースが少なくない。
賃金が低いだけでなく、社会保障の不備も問題だ。非正規社員は雇用保険の加入率６５．２％、健康保険５２．８％、厚生年金５１．０％で、いずれも９９％台の正社員と大きな差がある。経済的な理由や生活の不安のため結婚や出産を断念する人も多い。
「氷河期世代」の非正規社員は１５０万人（結婚している女性を除く）とも言われ、すでに４０歳を超え始めた。少子化につながっているだけでなく、いずれ無年金のため生活保護を受給するようになれば、社会的負担は膨らむばかりだ。この世代の雇用の改善を急がねばならない。
一方、今回の実態調査で、企業が非正規社員を雇用する理由のうち「正社員を確保できない」が前回調査（１０年）の１７．８％から２６．１％へ増えた。企業側に正社員雇用の意欲があっても、必要な人材が不足していることがうかがえる。
非正規社員の３０％は正社員に変わりたいとの希望を持っている。政府は「正社員転換・待遇改善実現本部」を設置し、経済界に正社員化を求めている。企業向けの「キャリアアップ助成金」制度も始めた。
ただ、正社員化を進めるためには、現実のニーズに合った公的職業訓練や人材育成策がもっと必要だ。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町 5-33　社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会　社会政策研究所発行